



介助犬シンシア、国会へ行く

ドアを開けたり物を運んだりして、体が不自由な人の生活を手助けする「介助犬」が一日、車いすの飼い主とともに初めて国会に入り、衆院予算委員会の審議を傍聴した。介助犬は盲導犬と違って統一的な認定基準がなく、ペット扱いされることが多いが、議院運営委員会理事会が「障害者の社会参加を進めるうえで意義がある」と傍聴を認めた。

ラブラドルレトリバー種の「シンシア」＝写真右＝(五歳、メス)と飼い主の兵庫県宝塚市中山台二丁目、コンピュータプログラムメーカー村佳友さん＝写真中央＝(三)。米国から来日した介助犬「リンカーン」と、飼い主で米ナショナル・サービス・ドッグセンター所長のスーザン・

ダンカンさんとともに、衆院第二議員会館で開かれた介助犬の勉強会に出席し、伊藤宗一郎衆院議長と面会した後、予算委へ。二頭は緊張した様子もなく主人のわきに座り、約十分間おとなしく「傍聴」した。

木村さんは交通事故で手足がまひして車いすを利用するようになり、六年前からシンシアと生活。昨年夏にはJR西日本、同東海と阪急電鉄から電車への同伴乗車を認められた。木村さんから「シンシアは手のかわり。公的な基準づくりを」と求められた伊藤議長は「シンシアは心を打つような仕事をしており、政治が守ってあげなければ、この出会いが無駄にならないよう努力したい」と約束した。

車いすの木村さんと予算委「傍聴」